草の根技術協力事業　事業評価報告

作成日：2023 年 4 月 28 日

１．案件の概要	
業務名称	エルサルバドル国立女性病院における科学的根拠に基づいた人間的出産プロジェクト
対象国・地域	エルサルバドル共和国
受託者名	東京大学
相手国実施機関	エルサルバドル国立女性病院、エルサルバドル保健省
全体事業期間	2017 年 12 月　～ 2023 年 4 月

２．事業の背景と概要

世界の妊産婦死亡の主要死因の１つとして、分娩後の異常出血が挙げられる。2014 年にエルサルバドル国立女性病院で実施した調査では、産婦の約 3 割が異常に出血し、WHO が推定した異常出血の世界平均 6.1%と比べ非常に高かった。しかも 80%の異常出血は、質の高い産科医療・ケアを提供することで予防可能な外傷性の出血で占められていた。そこで本事業は、プロジェクトの根幹として「人間的な出産*」をケアモデルに位置付け、科学的根拠に基づいた母児に優しい産科医療・助産ケアを提供することで、分娩時の安全と安楽の向上に貢献することを目指した。また、出血を増大させる医療介入の実施を減らし、女性の産む力、児の生まれる力を引き出すようなケアを提供できる医療者の人材育成を行うこととした。

*本事業では、「人間的な出産」を「人間の自然な営みである分娩を生理学的に捉え直し、過度な医療介入を避けるケア」「女性の産む力、赤ちゃんの生まれる力を最大限に活かせるようなケア」と定義している。

３．事業評価報告

（１）妥当性

当該国のニーズについて、妥当性は非常に高い。本事業の立案時、エルサルバドルの「国家開発 5 ヵ年計画 2014～2019 年」において、妊産婦死亡率の 35（出生十万対）未満の維持が最重要課題だった。また、保健省母子保健課が策定した「妊産婦死亡・乳児死亡削減国家戦略 2011～2014 年」では、妊産婦死亡削減の主要戦略の 1 つに「ケアの質の持続的な向上」を掲げ、その実現のためのアプローチの姿勢として、人間としての尊厳や尊重（Humanización）を挙げており、当該国のニーズと本事業計画の理念が合致していた。

事業期間中は、2021 年 1 月には、ブラジル第三国研修に参加した保健省カウンターパート（CP）が中心に取りまとめた「妊娠産褥期のケアガイドライン」で、人間的出産が推奨され、定義、ケアにつて詳細が記載された。2021 年 8 月には、大統領夫人のイニシアチブにより、母子を尊重したケアに関する法律「Nacer con cariño(尊厳のある出生と出産)」が公布され、「人間的な出産・出生」は女性の権利として認められることとなった。事業期間中、3 名の保健大臣が歴任したが、人間的出産の概念やケアは、政権が変わっても、法的基盤に支えられながらも一貫して重要視され、全国展開されてきており、本事業が、当該国のニーズに合致していると評価できる。

受益者の状況について、妥当性は非常に高い。公立病院の医療サービスは無償のため、多くの貧困層の女性が利用しており、本事業は脆弱層に配慮していると評価できる。

（２）整合性

我が国の開発協力方針について、整合性は非常に高い。本事業立案時の「対エルサルバドル共和国 国別援助方針」（2014年）は、「保健人材の育成及び質の向上と、妊産婦死亡率を削減する取り組みの推進」を重点分野の課題の1つとし、その対応方針が、保健行政の人材強化、医療機材・病院の維持管理能力の向上、母子保健対策、看護教育であった。母子保健分野の医療人材育成を目指す本事業は、我が国の援助方針とも合致していた。

持続的開発目標（SDGS）達成に向けた国際協力の取り組みとして、保健（Goal 3）「すべての人に健康と福祉を」実現するため、日本の保健・医療に関する人材、知見及び技術の活用を方針の一つとして掲げている。人間的出産プロジェクトは、世界に誇る日本の助産の優位性があり、JICAが四半世紀に渡り他国を含め継続実施してきた技術協力の知見と技術を活かす事業である。よって本事業は日本政府の開発協力方針と整合性があると評価できる。

JICA他事業との相乗効果・相互関連について、整合性は高い。本事業モデルであるブラジル国JICA技術協力「家族計画・母子保健プロジェクト」（1996～2001年）、およびエルサルバドル国「シャーガス病対策プロジェクトPhase 2」（2008～2011年）の元専門家が本事業に関わっており、先行案件の知見・ノウハウ・人脈を活かして実施された。

（３） 有効性

プロジェクト目標の達成について、有効性は高い。プロジェクト目標「国立女性病院における妊産褥婦・新生児医療サービスの向上」は、産科ケア満足尺度で評価し、ベースライン調査時に比べ、インパクト調査時の満足度合計点は有意に上昇していた。なお現在、陣痛室には産婦による感想ノートが置かれ、当院での出産がとても幸せで、いかに満足のいくものであったかが綴られている。2023 年 2 月、本事業の最終渡航時も、産婦から産科ケアに満足しているコメントが聞かれ、本事業の有効性は高いと評価できる。

直接的な結果・短期的効果について、有効性は高い。本事業開始当初、陣痛室で女性は放置され、座ることもトイレに歩くことも禁止され、飲水・飲食もできず、ベッド上で仰向けに過ごすしかなかった。しかしブラジルの第三国研修の参加者の自律的な働きにより、2019 年には、陣痛室で産婦は上体を起こしたり、歩行、飲水・飲食が可能となったり、家族の付添いも認められ、産婦の要望に応じてフリースタイル出産も実践されるようになった。これらは、産婦の満足度に直接的に関わるケアの改善であり、短期間で達成されていることから、有効性は高いと評価できる。

（４）効率性

プロジェクト投入計画の効率性は、低・中程度であった。ベースライン調査実施に関し、CP との合意形成過程、日本とエルサルバドルにおける倫理審査承認過程に時間を要した。新型コロナウィルス感染症のパンデミックの影響を受けて、国立病院は診療以外の行為（教育・研究活動）が 1 年以上制限されていた状況が続いた。2022 年 6 月に共にプロジェクトを運営・管理してきた保健省主要 CP が更迭され、新メンバーが CP となってから、本事業との連携体制や関係構築が困難となり、活動実施の阻害要因となった。

（５）インパクト

間接的・長期的効果について、インパクトは大きい。プロジェクト上位目標は「エルサルバドル国の妊産褥婦と新生児の健康状態の改善」であり、2021 年公布・2022 年施行の「Nacer con

cariño(尊厳のある出生と出産)」の法的後ろ盾を得て、上位目標が達成できる見込みは高い。

医療システムや人権への潜在的影響について、インパクトは大きい。国立女性病院、保健省幹部がブラジル第三国研修に参加し、帰国研修員が中心となり、分娩環境整備や On the Job Training による人材育成が基盤としてあったことが、どのようなケアを目指しているのかの明確なゴール設定につながり、医療従事者のコンセンサスが得られやすかった。もし、目指すべきケアを理解できないままに、新法の導入が進められていたのであれば、国立女性病院はじめ、他病院においても、新法がスムーズに導入されるのは困難が予測され、本事業の潜在的なインパクトは大きいと評価できる。

（６）持続性

政策および制度面について、持続性は非常に高い。科学的根拠に基づいた人間的出産の概念を内包した新法「Nacer con cariño(尊厳のある出生と出産)」に基づき、保健省は母子保健事業を展開することとなるため本事業終了後も、国家政策の優先活動として位置付けられる。そのため、本事業の効果は、当初の計画以上に非常に高い。

予算面について、持続性は高い。本事業を通じて向上した産科医療・助産ケアは、新法導入によって活動の継続が見込まれ、同法は世界銀行グループからの支援を得て実施されているため、今後も事業拡大に向けた予算を確保できる可能性がある。

技術面について、持続性は非常に高い。本事業を通じて向上した産科医療・助産ケアは、新法導入によって活動の継続が見込まれる。同法はアルゼンチンの「人間的出産に関する法律」を基に、アルゼンチンからのコンサルタント・技術支援を受けており、今後も定期的にアルゼンチンからの技術支援が得られる見込みである。なお、科学的根拠に基づいた人間的なケアは、JICA・中米統合機構（SICA)・本事業の協働により、全国レベル・中米レベルで周知されるに至ったが、本事業終了後も、ブラジルの支援を得ながら、中米レベルの科学的根拠に基づいた人間的出産の拡大が期待される。

（７）市民参加の観点での評価

本事業および人間的出産に関する紹介は主に看護学･助産学分野を中心とした国内外の学会、書籍・雑誌で紹介され、国際協力に憧れる若い世代の看護職人材に対する啓発活動にもなり、現在、看護領域で本事業に対する認知度は高い。本事業の実施主体である、東京大学大学院　母性看護学・助産学分野のホームページにプロジェクトに関する Web ページを作成した。当初は定期的に本事業の取り組みを発信する予定であったが、定期的な活動報告は実施できなかった。

４．今後に活かすためのグッドプラクティス・教訓等

活動の主軸としてのブラジルとの南南協力を据えた効果は大きかった。ブラジルの社会状況･インフラ・文化はエルサルバドルと類似しており、病院を取り巻く状況も同様に厳しい。研修受け入れ先のソフィア・フェルドマン（SF）病院は、人間的なケアを実践する人間的出産の国際的なリファレンス病院であり、SF 病院自身が、1990 年代の医療化された出産現場を、約 20 年かけて女性が主体となる人間的出産にシフトしてきた。そのため、エルサルバドルにおける「人間的なお産」の実現可能性を、経験を共有しながら説得し見本を示してくれたことが、エルサルバドルの医療従事者へのモチベーションを大いに刺激したと考える。今後は、エルサルバドルが人間的出産の中米でのリファレンス病院となり、モデルとなることが期待される。